

國學院大學 教職課程科目

ICT教育の理論と方法 第9回



# 特別支援教育におけるICT活用②

ICT機器を効果的に活用した実践／ICT機器を効果的に活用した校務の在り方とデータの活用

高等学校情報科教員 稲垣 俊介

※宿題の入力フォームは私のWebにあります。

# 課題

「情報モラル」の授業スライドを**PowerPoint形式**で作成してください。  
もしPowerPointをお持ちではないならば、大学のPC室での作成をお願いします。  
**スライドのノートの部分にはそのスライドで話す内容**を示して下さい。

作成するのは50分の授業ですが、**授業内で紹介できるのは7分となります**（申し訳ないのですが、発表準備を含めて7分で切らせてもらいます）。

どのように紹介すれば良いのかをよく検討し、聴衆である学生さんや私（稲垣）にわかりやすく発表にしてください。

ちなみに紹介スライドを作るのではなく、あくまで**作成するのは授業スライド**であり、かつプレゼン時には同じスライドを使います。

発表の際に利用するのは自分の端末です。私の端末はお貸してできませんので、ご自身でご準備ください。

# 課題

情報モラルの授業で利用する素材は**すべてPowerPointに埋め込む**ようにします。授業で配布するプリント等はWord形式で追加で提出できますが、プリントの配布は講義ではできませんので、聴衆に理解をしたもらえるための工夫も必要です。

できるだけ**全員が発表していただくつもり**でおります。ただ、発表できるのは**1講義あたりで発表できる人数に限り**があります。

もし前半で発表する学生さんが少なければ、後半は希望者が増えるかもしれません。しかし、それでも発表できる時間は増やしません。

よって、出来るだけ前半で発表をするのが良いと思いますが、自由に希望者順の発表としたいと考えます。

**実際に私の高校の授業でも同じ形式**なのです(このあたりは講義内でも触れることができれば触れますね。)

# 課題

- K-SMAPY II を通して提出です。
- 再提出可能です。再提出を含めて最終提出日は12/10(日)の21時までとなります。
- 発表日は12月18日, 12月25日, 1月15日(ここは厳しめ)となります。
- 締め切り後や他の方法での提出等は一切認めません。余裕をもって提出しましょう。

**前回の課題提出より**

# 実習A

皆さん(稲垣を含む)の意見を聴いて、  
さらに思うことがあれば自由に書いてみてください。

「授業が成立しない」レベルの学校についての話が印象的でした。話を聞かせるとか、提出物を出させる、問題集を解かせるという段階でもなく、面白いと感じてもらうことだけを目標に1年間授業を行うということが、今まで考えていなかったもので少し考えてしまいました。結果ではなく生徒の主観だけをモチベーションにして、学ぶことに興味のない生徒の関心を惹きつけるような授業とはどのようなものであるか気になりました。

(一部抜粋) 授業の形態において、ただ授業を変えても評価の仕方を根本的に変えなければ何も変わらないのではないかと思います。他の講義で、グループワークの意義について考えましたが、みんなで話し合い答えを考えさせるには、ある程度の知識と意欲があることが前提になっていると思います。



生徒に面白いと思わせたら勝ちだという先生の意見が印象に残りました。生徒の興味をひいて勉強への嫌悪感をなくすことも教師の大切な役割だと思いました。

先生は大学は研究する機関だとおっしゃっていましたが、私は言語の学科に所属しているので今までの延長で勉強している感覚しかなく、評価基準も知識テストで研究しているとは思えなかったのもので、言語の研究とは何か考えてみようと思いました。

探究の「仕方」を学ばせる、その比重を学年が上がるごとに増やす、ということには賛成なのですが、高校と大学の区別が曖昧になったり、通っている学校のレベルによって探究中心なのか知識を身につけること中心なのか変わってくることに對して良いのか悪いのかどちらの影響も考えてみる必要があると思いました。私のイメージ的に、「知識を身につける→その知識を深掘りして探究する」という段階があるので、ひとくちに探究をするといっても探究の深さの違いや知識も探究も中途半端になってしまう可能性があるのではないかと考えました。

探究の「仕方」を学ばせる、その比重を学年が上がるごとに増やす、ということには賛成なのですが、高校と大学の区別が曖昧になったり、通っている学校のレベルによって探究中心なのか知識を身につけること中心なのか変わってくることに對して良いのか悪いのかどちらの影響も考えてみる必要があると思いました。私のイメージ的に、「知識を身につける→その知識を深掘りして探究する」という段階があるので、ひとくちに探究をするといっても探究の深さの違いや知識も探究も中途半端になってしまう可能性があるのではないかと考えました。

(一部抜粋) 無気力な学校では知識の授業がむしろ意味をなさないという話に納得した。ただ、楽しませたら勝ちというのはその子の進路についてはどうするのだろうかと思う。英語をあげるとそもそも英語嫌いでなおかつ授業を聞く気がないときてそれが40人とはなんとも恐ろしいと思った。ただ、ひどいパターンばかり考えても今の私に大きな成長はない気がするため、まずは理想論ばかりにならないようにするための現実として捉えておこうと思った。

何故学ぶ必要があるのかというのをいざ生徒に聞かれた場合、単に「大事だから」「将来使うから」「人を振り分けるのに使いやすいため」などふわっとした答えを返してしまいそうで怖いなと感じました。自分の中で一番強く思っているのは「選択肢をふやすため」という答えをもって望んでいますが、今後社会等の変化に対応して関わられるようになりたいです。

ただ単に教科書的な授業するのではなく、写真や絵、実物を用いて教えることで記憶に残りやすいということは、自分でも利用したいなと思いました。

(一部抜粋) 自分の中学校の時の社会科の先生も国内ですがいろいろな場所に行って、その場所の写真や特産品を持って帰ってきて見せてくれる人で、その人にあこがれて自分も将来の生徒たちに見せられるようにと、海外・国内旅行に行った際には良く写真を撮るようにしています。

教育内容をどれだけ変えていっても、テスト形式が変わらない限り、結果として何も変わらないという言葉が心に残りました。現在の教育は主体性を養うものに変化する傾向にあったり、ICT技術を積極的に取り入れる傾向にあたりと、その方式に変化が加えられていると感じることがありますが、やはり定期テストや入試問題などの形式が、単に知識を問うものである限り、教育方式の変化の影響や効果は薄れてしまうのではないかと考えさせられました。



授業を成立させるのが難しいレベルの学校に関するお話が印象に残りました。無気力な生徒たちの興味を引き出すことに重きを置く授業が求められるということに納得しました。今日本で求められている教育を検討していくのは大切なことだが、それ以前にまずその学校で求められている教育を模索することも教員の一つの課題だと感じました。そしてやはりこれは教員としての経験があればあるほど引き出しが増えると思うので、教員になる事が出来たら忘れないようにしたいことの一つになりました。

# 実習3

この授業で学んだことを「深く」考えて書きましょう。

(一部抜粋) 見た目で障害を持っていることが分かったり、周囲の人がそれを理解できる状況の子は支援の方法などが分かり手助けがしやすい、されやすいと感じます。しかし、現在の中学校、高校には周囲の人には普通の人と思われていながらも授業を受けていくうえでなにか違和感がある、ついていけないなど悩んでいる生徒がいると思います。そんな子たちが自分自身でこれが出来ないからこのアプリ、デバイスを活用しようと思えるくらい様々なICTが普及すると良いと思います。

(一部抜粋) ICTを使用した授業を特別支援で行う事は問題ないと思う。しかし、テストは不平等になるのではないかと考えてしまいます。テストは条件を基本的に同じにしなければならないと思います。もし、ICTをテストに導入するのならば、全体にICTを導入しなければならないと思います。

特別支援教育という観点で今回は授業がされましたが実際小学校・中学校の時には私の学校にもいて、授業は別でしたがイベントごとには一緒に行っていました。そういったところで積極的に障害を持たないことそういった子たちと一緒にさせることで相互理解が望めて差別が減るのではないかなと思いました。

ICTを特別支援教育に用いるという観点では、ICTという一つの壁を通すことで支援を必要とする生徒と障害を持たない子どもたちと同じレベルの習熟度として授業を受けることができるようになるのではないかなと思いました。

特別支援教育という観点で今回は授業がされましたが実際小学校・中学校の時には私の学校にもいて、授業は別でしたがイベントごとには一緒に行っていました。そういったところで積極的に障害を持たないことそういった子たちと一緒にさせることで相互理解が望めて差別が減るのではないかなと思いました。

ICTを特別支援教育に用いるという観点では、ICTという一つの壁を通すことで支援を必要とする生徒と障害を持たない子どもたちと同じレベルの習熟度として授業を受けることができるようになるのではないかなと思いました。

(一部抜粋) 生徒全体の数が減ったが、特別支援教育を必要とする生徒は増えているということを知って、より、教育の多様化が必要だなと思った。難しいことではあると思うが、障害がある無しに関わらず、一人ひとりの生徒のニーズに合わせた教育ができれば良いなと思う。

(一部抜粋) 大学入試の手段としての勉強や暗記は、問題を作成する側の立場からしたら仕方ないことなのかもしれないと思うが、大学が高等教育機関であることを加味すれば高等教育機関たる在り方を保つための人材を入れるには多少の地頭の良さが優遇されるのは仕方ないと思う。諦めろとは言わないが、自分に合った場所を選び、やりたいことを伸び伸びとやるためには必要な篩なのではないかと思う。



(一部抜粋) また、身体的な障害はなかったとしても、思っていることを口に出してしまう子、いわゆる空気が読めないのが度を超えている子も勿論中に入ると思うので、そういった様々な特性を持った生徒と出会ったときに、まずできるのはその子たちを理解することであろうなと思う。それですべてが解決するわけではないけど、まずは理解を示してあげること、そのうえでどうかかわっていくかをよくよく考えるべきだとは思っている。まだ答えは出てない。

(一部抜粋)最後の先生の平等についての話は、正直いろいろな立場の平等があってすごく難しいなと感じました。今この場で答えを出すことは出来ませんが、少なくともこのようなケースに立ち会うことはあるかと思います。そんな時は逃げずに、お互いの立場、配慮を尊重し、せっかくなのでこのICTの授業で生かしたこと、ICTを用いて向き合うことが出来ればなと思います。

(一部抜粋)障がいのある生徒とそうではない生徒を一緒にどのように学ばせるかはかなり難しい問題だと思います。それに対してICTが役立つとおっしゃっていて可能性の幅を強く感じました。授業で取り上げられていたDAYSYS教科書は、個別に教師が作成していたらとても時間がかかることをかわりにしてくれる点でとても便利だと思いました。

(一部抜粋) 多様性が叫ばれるこのような現代の世の中になったからこそ、特別支援が必要だと診断される人が増えていると思うし(最近ではADHDやASD、学習障害の存在が知られてきているからこそ)、多様性、障害を盾にして、免罪符にして「私は障害を持っているんだから、みんなができていくことができなくて当然だ」という人が増えてきたように感じる。

(教員を目指している立場としてこのような発言は慎むべきかもしれないが)

しかし多様性がそのような免罪符として使われている現代社会に私は日々もやもやしている。

(一部抜粋)ICTを利用することで様々な困難を抱える児童生徒が他の人と同様に学ぶことができるという点は本当に素晴らしいことであると思いますし、だからこそ使用するICTやその他の手段に対して優遇されていると斜めに見るのではなく、その人が学ぶために必要なものであるのだとフラットな状態であれる人が増えるといいなと思います。

(一部抜粋)ICTを利用することで様々な困難を抱える児童生徒が他の人と同様に学ぶことができるという点は本当に素晴らしいことであると思いますし、だからこそ使用するICTやその他の手段に対して優遇されていると斜めに見るのではなく、その人が学ぶために必要なものであるのだとフラットな状態であれる人が増えるといいなと思います。

(一部抜粋) 試験を受けるとき、手が不自由な生徒に程度の問題はあれど時間を延長するなどの措置を取ること配慮のうちだと思うが、座ってられないとか声を出してしまう生徒は不正行為の対象としないのは良いことなのか考えてしまう。通常学級に通う以上、なるべく他の人と同じ条件でテストを実施すべきだろう。通常学級に通うことを拒んではいけないが、通常学級のルールを受け入れられないのならその生徒のためにもいくつかの選択肢を提示した方がいいと思う。

この授業を聞いて、一斉授業は時代遅れだと改めて感じた。前を向いて静かに受ける授業だから席に座れない子供や場をわきまえず発言してしまう子供が目立つ。しかし、グループワークなどの自由に動き考える授業であれば、積極的な子どもとして捉えることができる。また、子供同士での活動場では、お互いに影響を受けることが多い。一方的な授業ではインクルーシブ教育は言葉だけでただのふれあいに終わってしまうと思う。知識伝達の授業から意見発信の授業に変えていかなければならないと感じた。



障がいが障がいであるのは、現代社会のせいだと聞いたことがある。例えば、多動性障がいは狩猟時代には問題にならなかった。当然じっと座っている時間よりも狩猟などで動いている時間のほうが多い。それが現代社会になるとじっと座っていることが求められ、多動性障がいが問題になるようになった。このような大昔では問題にならなかった障がいもあるので、障がいをもつ人でもその障がいによる問題を気にせずに生きやすい環境を作ることができるのではないか。

(一部抜粋) 同じ条件下で実力を問うことは難しそうだと感じた。私自身遺伝もあり視力が弱く、メガネやコンタクトを日常的に使っていて、一般的に視力を補うことは当たり前のことのようにありますが、語弊があるかもしれませんが補うことが認められる範囲はどこまでのものなのかをテストのあり方を問うことと共に考えなくてはならないと思いました。

# 実習A

皆さん（稲垣を含む）の意見を聴いて、さらに  
思うことがあれば自由に書いてみてください。

# 講義

特別支援教育におけるICT活用②

# 講義のカリキュラム

1. 特別支援教育とは
2. ICTを用いた特別支援教育
- 3. 特別支援教育に対する考え方**

# 3. 特別支援教育に対する考え方

私たち教員もICTに支えられている  
授業実践／校務

# あたりまえへのアクセスという考え方

発達障害・知的障害のある子どもから成人とその家族が、さまざまなソーシャルサポートやICTを用いながら、**すでにできていることはさらに高め、やりたいことはとことん支援付きで可能にする、そのための方途を具体的、実証的に探求しています。めざすのは「あたりまえへのアクセス」であり、その先にあるのはQOLの向上です。**





## 「あたりまえへのアクセス」



「支援者や周囲の人にとってのあたりまえのこと」「社会通念や常識」「生活年齢から期待される一般的なこと」



「当事者やその家族が思い描くあたりまえのこと」



Copyright © 2003-2020 Mizuuchi-Lab. All Rights Reserved.



出典:知的・発達障害児・者とその家族の想う「あたりまえへのアクセス」のために(島根大学・水内豊和)



出典:知的・発達障害児・者とその家族の想う「あたりまえへのアクセス」のために(島根大学・水内豊和)



出典:知的・発達障害児・者とその家族の想う「あたりまえへのアクセス」のために(島根大学・水内豊和)

# 実習Ⅰ

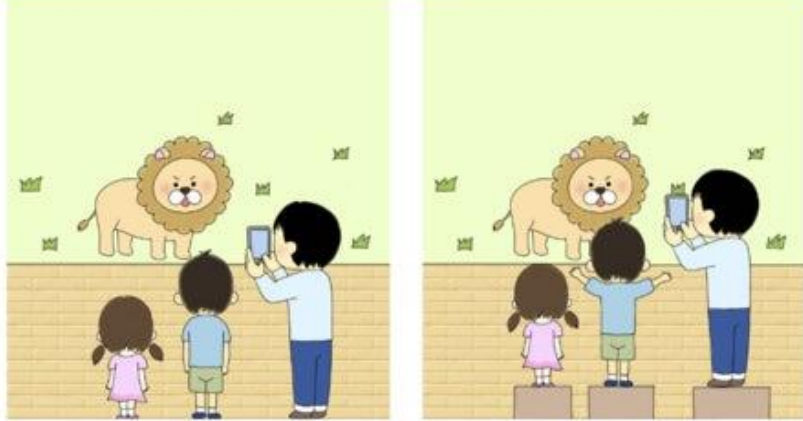
今の話、「あたりまえのアクセス」についてあなたはどのように感じましたか？

あなたの素直な感想や意見を聞かせてください。

# まとめ 個別最適化された学び・協働的な学びを保障するために

水内豊和 (富山大学人間発達科学部)

本人の思う  
「あたりまえへのアクセス」が  
できない状況



無理解な社会

あまり意味のない  
「公平」「平等」

本人の思う  
「あたりまえへのアクセス」が  
できる状況



合理的配慮

UD

基礎的環境整備  
+ 合理的配慮

- ・ UD、基礎的環境整備、合理的配慮、個に応じた配慮・支援について理解する
- ・ 「障害」は「社会の中」にあるという視点を持つ
- ・ 支援の原則は、「内容」を下げるのではなく「方法」で支えること！

「あたりまえへのアクセス」とは  
こちらのnoteをご覧ください



Copyright © 2003-2021 Mizuuchi-Lab.

出典: 知的・発達障害児・者とその家族の想う「あたりまえへのアクセス」のために (島根大学・水内豊和)

# 実習2

実習1の素直な感想を踏まえて、あなたはどのように特別支援教育が行われていくことが理想であると思いますか。また、その理想のために自分ができることは何だと考えますか。

# まとめ

特別支援教育の実施にあたり、ICT技術が役に立つことは間違いなさそうです。

私の役割はICTが教育に導入されることへの理解を深めることであると思い、ここに立っています。

それがゆくゆくは「特別支援教育におけるICT活用」へとつながることであると考えています。あなたも、どのように特別支援教育とかかわっていきますか？



# 次回予告

- 次回の講義は、リフレクションの紹介のみで終わります。
- あとは、発表に関して個別に質問を受け付けることにする予定です。
- 発表に利用するスライドやPCを持ってくれば、接続のテストもできますよ。